

2011.3.28

# 障害抱えたわが子叫ぶ

## 夜の避難所、不安募る母



多くの被災者で混雑する中学校の避難所。27日午後、岩手県陸前高田市

「ガムテープで口を閉じてしまいたくなるけど、できないよね」。知的障害のある長女(39)と2人で宮城県女川町の避難所に身を寄せる母親(69)は、かたわらの娘に目をやってつぶやいた。約70人が眠る避難所の夜、長女はときおり叫び声を上げる。小声のする室内はそのたび静まり返る。地震の前、長女の後見人に長男(49)を選任する決定通知

が裁判所から届いていた。母親は3年前にがんを患い、後を託したのだ。妻子と町内で暮らしていた長男は消防団員。行方はいまだに分からない。「私が元気なうちになんとか段取りをしたい。2人で生き残ってしまったのでもの」

長女の障害者手帳に記された程度は重度とされる「A」。トイレには母親が付いて行く者への対策はいつも後回し。当事者のことはなかなか分らないよね。今のままで行き場はない。いつか出て行けと言われるのでは、この不安が募る。

2人の布団はほかの避難者から少し離れて並んでいる。分け合って食事をするとき以外、長女はほとんど横になって過ごす。夜は頭まで布団に潜り込む。声が漏れないように、長女なりに気を使っているの

く。夜中に叫ぶのは、子どものころ周囲にからかわれて言わされていた言葉。「聴くに堪えない汚い言葉なの」。母親は口を手を添えて言った。地震が起きた時、長女は高台にある障害者の通所施設にいた。近くの自宅から迎えに行った母親と一緒に避難所へ。自宅は津波で跡形もなく流された。

21日の夕方、避難所を町議が訪れた。「どんなに小さくてもいい。障害者の家族だけが集まれる避難所が欲しい」。繰り返し懇願する母親に「いまはみんな家がない。特別扱いはできない」との答え。町議が帰った後、母親は静かに憤った。「数が少ない障害者への対策はいつも後回し。当事者のことはなかなか分らないよね。今のままで行き場はない。いつか出て行けと言われるのでは、この不安が募る。」

だという。

「自分は試されていると思う。ここで負けてしまっただけで息子が浮かばれない。出て行けと言われるまで、居続けようと思えます。」